小林秀雄集

日本文学全集　42

筑摩書房

日本文学全集42　小林秀雄集

昭和四十五年十一月一日発行

著　者　小林秀雄

発行者　竹之内静雄

発行所　株式会社筑摩書房
東京都千代田区神田小川町二ノ八
電話東京二九一―七六五一（代表）
振替東京四一二三

本文整版　株式会社精興社
本文印刷　多田印刷株式会社
製本　株式会社鈴木製本所

小林秀雄集　目次

ランボオ　I II III　五
モオツァルト　三三
セザンヌ　六四
フロオベルの
『ボヴァリイ夫人』　九四
「罪と罰」について　九九
「白痴」について　一三八
「未成年」の独創性に就いて　一九三
『地下室の手記』と
『永遠の良人』　二〇三
ドストエフスキーの時代感覚　二二五
一ツの脳髄　二三七
おふえりや遺文　二三三
Xへの手紙　二四四
様々なる意匠　二六〇
文学は絵空ごとか
批評家失格　二七一
故郷を失つた文学　二七六
私小説論　二八六
私小説について　二九二
作家の顔　三一一
思想と実生活　三二四
佐藤春夫論　三二七
佐藤春夫のヂレンマ　三三三
三三六

志賀直哉
谷崎潤一郎
正宗白鳥
『仮装人物』について
当麻
無常といふ事
平家物語
徒然草
西行
実朝
年譜
人と文学　中村光夫　四八四
疑惑　三三八
真贋　三四八
感想　三五七
言葉　三六一
杭州　三六五
杭州より南京　三六七
蘇州　三七〇
慶州　三七三
満洲の印象　三七四
四〇〇
四二二
四二一
四二六
四三一
四四一
四五三
四五九
四六一

口絵写真提供　文藝春秋社

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.com

小林秀雄集

本居宣長（一）

小林秀雄

本居宣長について、書いてみたいという考へは、久しい以前から抱いてゐた。戦争中のことだが、「古事記」をよく読んでみようとして、それなら、面倒だが、宣長の「古事記傳」で[illegible]と思[illegible]た、読んだことがある。それから間もなく

ランボオ

I

この孛星が、不思議な人間厭嫌の光を放つてフランス文学の大空を掠めたのは、一八七〇年より七三年まで、十六歳で、既に天才の表現を獲得してから、十九歳で、自らその美神を絞殺するに至るまで、僅かに三年の期間である。この間に、彼の怪物的早熟性が残した処（二五〇〇行の詩とほぼ同量の散文詩に過ぎない）が、今日十九世紀フランスの詞華集に、無類の宝玉を与へてゐる事を思ふ時、ランボオの出現と消失とは恐らくあらゆる国々、あらゆる世紀を通じて文学史上の奇蹟的現象である。

その過半が全く孤独な放浪に送られたランボオの生涯は、彼のみの秘密である幾多の暗面を残してゐる。又、彼がその脳漿を斫断しつつ、建築した眩暈定著の秘教は、少くとも私には晦渋なものである。この小論は勿論研究と称せらるべきものではない。ランボオ集一巻を愛した者の一報告書に過ぎないのである。

＊

「偉大なる魂、疾く来れ」一八七一年十月『酩酊の船』の名調に感動したヴェルレエヌは、シャルルヴィルの一野生児を巴里に呼んだ。すばらしい駄々つ子を発見するものは、すばらしい駄々つ子でなければならない。「ラシイヌ、ふふんだ、ヴィクトル・ユウゴオ……堪らない」ランボオの魁崛な詩想に、而も既に詩歌勦絶の理論の浸蝕し始めてゐたその脳髄に、サロンの饒舌が如何に映つたか。彼は、ファンタン・ラツウルが描いた様に机の一隅に不器用に肱をついて沈黙してゐる他はなかつた。「流竄の天使」は、忽ち一大無意識の詩人ヴェルレエヌの心を捕へた。ヴェルレエヌは、腹を立てた細君を置き去りにした。二人はビスケットを嚙りながら放浪を始めた。

実際、私は、心底からの誠をもつて、彼を、太陽の子の本然の姿に、かへしてやらうと請合つた。そして、私達は、間道に酒をのみ、街道にビスケットをかじり、さまよひ歩いた、私は、場所と形とを発見しようと急き込みながら。（Les Illuminations, Vagabonds.）

性急な絶対糺問者と人間性に酩酊する詩人との間に当然の破綻が起らねばならない。終末は、一八七三年七月ブラッセルに於ける驚くべき喜劇に終る。

「これは貴様の為だ――俺の為だ――全世界の為だ」離別の悲しみに胸を貫かれた醉漢ヴェルレエヌは、戸口に椅子を据ゑて、壁に凭れたランボオを狙つた。この時、二人の魂は相擁して昇天しなければならなかつた筈だ。然し、ピストルは放たれ、弾丸は、ランボオの左手に命中した。二人は絶縁した。恐らくそれは、彼等の心情が、不幸にもあまり純情過ぎたといふ事であつた。各々その情熱の化学に忙しかつた。

十二月、ランボオは、ロオシュにあつて、手元の原稿を全部焼棄して、永遠に文学の世界を去つた。一八九一年、アフリカで滑液膜炎に罹り、マルセイユの病院に送られた。其処で、この大歩行者の片足は切断され、十二月十日、三十七歳でこの天才は、一商人として死んだ。当時彼の唯一人の看取りであつた妹イザベルは「死に行くランボオ」の痛ましい姿を書いてゐる。

文学に離別して以来、殆んど二十年に近い漂泊である。彼はナポレオンの如き神速を以て、その到る処の国語を征服しつゝ転々した。英国、独逸、伊太利、西班牙、ジャヴァ、スカンヂナヴィヤ、エジプト、シプル島、アラビア、エチオピヤと。彼は英国ではフランス語の教師であつた。西班牙では、ドン・カルロス党員であつた。ジャヴァでは和蘭陀の志願兵、スカンヂナヴィヤでは曲馬団の通訳、アフリカ内地では、珈琲、香料、象牙、並に黄金の商人、隊商の頭、探検家――長々しい、諸君は、彼の義弟パテルヌ・ペリションの手に成る、或は、ジャン・マリイ・カレのものする無類の奇譚を読まれんことを。

*

宿命といふものは、石ころのやうに往来にころがつてゐるのではない。人間がそれに対して挑戦するものでもなければ、それが人間に対して支配権をもつものでもない。吾吾の灰白色の脳細胞が壊滅し再生すると共に吾々の脳髄中に壊滅し再生するあるものの様である。

あらゆる天才の作品に於けると同様ランボオの作品を、その豊富性より見る時は、吾々は唯眩暈するより他能がないが、その独創の本質を構成するものは、決して此処にないのである。例へば、『悪の華』を不朽にするものは、それが包含する近代人の理智、情熱の多情性ではない。其処に聞えるボオドレエルの純粋単一な宿命の主調低音だ。

創造といふものが、常に批評の尖頂に据つてゐるといふ理由から、芸術家は、最初に虚無を所有する必要がある。そこで、あらゆる天才は恐ろしい柔軟性をもつて、世のあらゆる範型の理智を、情熱を、その生命の理論の中にたたき込む。勿論、彼の錬金の坩堝に中世錬金術士の詐術はない。彼は正銘の金を得る。ところが、彼は、自身の坩堝から取出した黄金に、何物か未知の陰影を読む。この陰影こそ彼の宿命の表象なのだ。この時、彼の眼は、癡呆の如く、夢遊病者の如く、見開かれてゐなければならない。或は、

この時彼の眼は祈禱者の眼でなければならない。何故なら、自分の宿命の顔を確認しようとする時、彼の美神は逃走して了ふから。芸術家の脳中に、宿命が侵入するのは必ず頭蓋骨の背後よりだ。宿命の尖端が生命の理論と交錯するのは、必ず無意識に於てだ。この無意識を唯一の契点として、彼は「絶対」に参与するのである。見給へ、あらゆる大芸術家が、「絶対」を遇するに如何に慇懃であつたか。「絶対」に譲歩するに如何に巧妙であつたか。

蓋し、ここにランボオの問題が在る。十九歳で文学的自殺を遂行したランボオは芸術家の魂を持つてゐなかつた、彼の精神は実行家の精神であつた、彼にとつて詩作は象牙の取引と何等異る処はなかつた、とも言へるであらう。然しかかる論理が彼の作品を前にして泡沫に過ぎない所以は何か。吾々は彼の絶作『地獄の一季節』の魔力が、この作品後、彼が若し一行でも書く事をしたらこの作は諒解出来ないものとなると云ふ事実にある事を忘れてはならない。彼は、無礼にも禁制の扉を開け放つて宿命を引摺り出した。然し彼は言ふ。「私は、絶え入らうとして死刑執行人等を呼んだ、彼等の小銃の銃尾に嚙み附く為に」と。彼は、逃走する美神を、自意識の背後から傍観したのではない。彼は美神を捕へて刺違へたのである。恐らく此所に極点の文学がある。

*

『酩酊の船』は、瑰麗な夢を満載して解纜する。

われ、非情の河より河を下りしが、
船曳の綱のいざなひ、いつか覚えず、
罵り騒ぐ蛮人は、船曳等を標的にと引つ捕へ
彩色とりどりに立ち並ぶ、杭に、赤裸に釘附けぬ。
船員も船具も、今は何かせん、
ゆけ、フラマンの小麦船、イギリスの綿船よ。
わが船曳等の去りてより、騒擾の声も、はやあらず、
流れ流れて、思ふまゝ、われは下りき。

(Bateau Ivre)

彼はこの船の水脈に、痛ましくも来るべき破船の予兆が揺曳するのを眺めなかつたか。彼はこの時既に死につつある作家であつた。

想へば、よくも泣きたるわれかな。来る曙は胸抉り、
月はむごたらし、太陽は苦し。
切なる恋に酔ひしれし、わが心は痺れぬ。
竜骨よ、砕けよ、あゝ、われは海に死なむ。

今、われ、欧洲の水を望むとも、
はや、冷え冷えと黒き潴水、吹く風薫る夕まぐれ、
悲しみ余り、をさな児が、蹲つては、その上に、

五月の蝶にさながらの、笹舟を放つ潴水かな。

あゝ、波よ、ひとたび汝れが倦怠に浴しては、
綿船の水脈曳くあとを奪ひもならず、
標旗と焔の驕慢を横切りもならず、
船橋の恐ろしき眼を掻潜り、泳ぎもならじ。

(Bateau Ivre)

ランボオのリイルは、最初から聊かの感傷の痕も持たない。彼は、野人の恐ろしく劇的な触覚をもつて、触れるものすべてを斫断する事から始めた。それは不幸な事であつた。その初期の作る処は、その煌く断面の羅列なのである。

人生斫断は人生嫌厭の謂ではない。多く人生嫌厭の形式をとるといふに過ぎない。ボオドレエルの眼がどんなに人生に対する嫌厭に満ちてゐようとも、彼は決して人生を斫りきざみはしないのである。彼は、その煩衝を起した空虚な眼の底に、一眦をもつて全人生を眺めるもう一つの静かな眼を失ひはしなかつた。「俺の心よ、出しやばるな、獣物の蟄を眠つてゐろ」虚無の味ひをかみしめて、彼の心臓は、人の世の流れと共に流れて行く。「獣物の蟄」——これこそランボオにとつて最も了解し難い声であつたのだ。

斫断とは人生から帰納することだ。芸術家にあつて理智が情緒に先行する時、彼は人生を切り裂く。こゝに犬儒主義が生れる。(勿論、最も広い意味に於てだ)ところが、人生斫断家ランボオには帰納なるものは存在しない。彼位犬儒主義から遠ざかつた作家はないのである。犬儒主義とは彼にとつて概念家の蒼ざめた一機能に過ぎなかつた。理由は簡単だ。ランボオの斫断とは彼の発情そのものであつたからだ。換言すれば彼は最も兇暴な犬儒派だつたので、そしてその兇暴の故に全く犬儒主義から遠ざかつて了つた。彼は、あらゆる変貌をもつて、文明に挑戦した。然し、彼の文明に対する呪詛と自然に対する讃歌とは、二つの異つた断面に過ぎないのである。彼にとつて自然すらはや独立の表象ではなかつた。或る時は狂信者に、或る時は虚無家に、或る時は諷刺家に、然しその終局の願望は常に、異る瞬時に於ける異る全宇宙の獲得にあつた、定著にあつた。見給へ、彼は旋転する。

俺の心よ、一体俺達の知つた事か、奔流する血と澳が、
百千の殺人が、尾を曳く叫喚が、……
すべての復讐、——糞でも喰へだ……だが、それでも
喧嘩が買ひたけりや、望む処だ……

(Vertige)

彼は、全力をあげて人生から竊盗を行つた。そして全く新しい金属の酒宴を開いたのだ。而もこの酒宴の背後には、何等人生の過去は揺曳してゐない。「自然に帰れ」とは、

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.com

彼にとつてあまり自明な事であつた。そこで彼は自然との交流を放棄して自然の奪掠を断行した。然しこの奇術師は、その燦然たる奇術を一体誰の面前で演じたらよいのか。彼は独語する。「吾は墳塋の彼方の人」と。

人生を寸断した時、彼が人類の過去を抹殺した事は不幸であつた、然しこの断面が、彼の専制的な生命の妄動を絶対糺問者の姿として反映した事は、彼に二重の不幸を強ひた。

「酩酊の船」は解纜する。彼は、はや自然から余す処なく奪つてゐたのである。彼は、奪掠品の堆積を眺めて吐息した。「おゝ波よ、吾ひと度汝れが倦怠に浮んでは……」然し彼の倦怠は、「パイプを咬へて断頭台の階を夢みる」者の倦怠ではなかつた。彼は人生に劇を見る事に離別したと信じた時、流絢たる新しい劇を建ててゐたのである。ここに奇妙な魂の一状態がある。

解体された世界は、金属の瀑布となつて、彼の眼前を鎔流した。彼の見たものは、下り行く大伽藍であつた、上り行く湖水であつた。回教寺院は工場と連絡し、無蓋四輪馬車は天の街道を疾走し、物語は海と衝突した。あらゆるものは彼の願望に従つて変形され染色される。あらゆる発見が可能である。あらゆる発想が許された。

もはや、彼のリイルが外象に触れて鳴るのではない。彼は、神速純粋な精神の置換を行ふのである。自転車の鋼鉄は、ペダルから彼の血管に流入して、彼の身体は鋼鉄となつて疾走するのだ。

「かくて私は、言語の幻覚をもつて、私の数々の妖術的詭弁を説明した。私は遂に、私の魂の錯乱が祝聖されるのを見た」と。彼は、その陶酔を、人間の達し得られる極処に於て定著した。この一有性者の熾烈なる燃焼は、遂に、殆ど無機体の光芒を帯びるのである。「私は、架空のオペラとなつた」と。

*

ヴェルレエヌは恐ろしく無意識な生活者であつた。ランボオは恐ろしく意識的な生活者であつた。ヴェルレエヌが涸渇しなかつた所以は、彼が生活から何物も学ばなかつたからだ。彼の詩魂は最初から生活の上を飛翔してゐたのである。世のかりそめの荊棘にも流血する心臓を、彼は悔恨をもつて労つた。労られた心臓は、歌はれる為に彼にその悲痛の夢を捧げた。そこに永遠の歌があつた。ランボオは最初から生活に膠著してゐた。追ふものは生活であり、追はれるものも生活であつた。彼の歌は生活の数学的飛躍そのものの律格である。

彼は生活を理論をもつて規矩しようとした。然るに彼の理論は一教理といふ様なものではなかつたのだ。極めて迅速に動く生活意識であつた。生活を規定せんとする何者ももたないヴェルレエヌと生活を規定せんとするより他何物ももたぬランボオと、遂に外観上の対蹠に過ぎないのか。

ヴェルレエヌは、穢れを抱いて一切の存在に屈従する事によつて無垢を守つたのか。ランボオには、無垢を抱いて全存在を蹂躙する事によつて、無垢すら穢れと見たのか。

彼は陶酔の間に、自らの肉を削ぐ如く、刻々にその魂を費消してゐた。

「私の健康は脅かされた。恐怖は来た。幾日もの睡りに落ちては、起き上り、私は世にも悲しい夢から夢を辿つた。臨終の時は熟した。私の羸弱は、危難の途より、影と旋風の国、シムメリイの果て、世界の果てに私を駆つた」

「あゝ、私のサックスの柳の林。夕を重ね、朝を重ね、夜は明けて、昼の来て、……」彼は疲れた。彼は倨傲の最も高い塔の尖頂に攀ぢて忍んだ。この時だ、而も恐らく唯一の時だ。彼が、自身の魂を労つたのは。このすばらしい自動機械の忍耐が、如何に不思議な美しさをもつて歌はれたか。

最高塔の歌

時よ、来い、
あゝ、陶酔の時よ、来い。

よくも忍んだ。
忘れてしまはう。

積る怖れも苦しみも
空を目指して旅立つた。

今、条理もなく咽喉は涸れ
血の管に暗い陰はさす。
あゝ、時よ、来い、
陶酔の時よ、来い。

穢らはしい蠅共の
むごたらしい翅音を招き
毒麦は香を焚きこめて、
誰顧みぬ牧場は、
花をひらいて膨れるか。

あゝ、時よ、来い。
陶酔の時よ、来い。

残された道は投身のみである。彼は最後の斫断を為なければならない。

『俺はありとある祭を、勝利を、劇を創つた。俺は新しい花を、新しい星を、新しい肉を、新しい葉を発明しようとも努めた。俺はこの世を絶した力も獲得したと信じた。扨て、俺は俺の想像と追憶とを葬らねばならない。芸術家の、話し手の一つの美しい栄光が消えて無くなる

のだ。』(Une Saison en Enfer ; Adieu.)

*

全生命を賭して築いた輪奐たる伽藍を、全生命を賭して破砕しなければならない。恐るべき愚行であるか。然しそれは、彼の生命の理論であつた。

『地獄の一季節』――おのぞみなら諸君は、クウロンと共に一少年異端者の愚行を発見し給へ。或はドラヘイと共に神の言葉を発見し給へ。幸なことには、この宝匣は、諸君の好奇を満たすにあり余る宝石を蔵してゐる。彼は錯乱の天使となつて悪魔に挑戦した。毒盃を仰いだ異端者として神に挑戦した。然し、神も悪魔も等しく仮敵であつたのだ。この地獄の手帳に於ては、一切が虚偽である。而も一切が真実だ。

マストの尖頂から海中に転落する水夫は、過去全生涯の夢が、恐ろしい神速をもつて、彼の眼前を通過するのを見るといふ。「最高塔」の頂から身を躍らせたランボオは、この水夫の夢を把握して、転落中耳朶を掠める颷風の如き緊迫した律動をもつてこれを再現したのである。そして転落中の叫喚が旋転する発想を与へた。最後の一叫喚そのものが、最後の一発想となつた。

――今や、魂の裡にも、肉体の裡にも、真理を所有する事が、俺には許されよう。と。

リイルの駒はくだけて散つた。ランボオはアフリカの沙漠に消えた。吾々は、はや沙漠の如く退屈な、沙漠の如く無味な、然し沙漠の如く純粋な彼の書簡集のみしか読む事が出来ない。

ランボオが破壊したものは芸術の一形式ではなかつた。芸術そのものであつた。この無類の冒険の遂行が無類の芸術を創つた。私は、彼の邪悪の天才が芸術を冒瀆したと言ふまい。彼の生涯を聖化した彼の苦悩は、恐らく独特の形式で芸術を聖化したのである。

あらゆる世紀の文学は、常に非運の天才を押し流す傍流を生む。蓋し環境の問題ではないのである。或る天才の魂は、傍流たらざるを得ない秘密を持つてゐる。後世如何に好奇に満ちた批評家が彼の芸術を詮表しようとその声は救世軍の太鼓の様に消えて行くだらう。人々はランボオ集を読む。そして飽満した腹を抱へて永遠に繰り返すであらう。「然し大詩人ではない」と。

(大正十五年十月)

II

四年たつた。

若年の年月を、人は速やかに夢みて過す。私も亦さうであつたに違ひない。私は歪んだ。ランボオの姿も、昔の面影を映してはゐまい。では私は、今は狷介とも愚劣ともみ

えるこの小論に、而も、聊かの改竄の外、どうにも改変し難いこの小論に、何事を追加しようといふのだらう。常に同じ振幅を繰り返さなかつた私の動き易かつた心を、こゝに計量しなければならないのか。

私はこの困難を抛棄する。人々を退屈させない為に、私を無益にいぢめつけない為に。だが、私はもう、自分をいぢめつける事には慣れ切つた、どうやら自分を労る事と区別のつかぬこの頃だ。己れを傷けない為に、己れを労る為に、――一体何の意味がある。人々を退屈させない為に、恐らく其処には、覗かねばならぬ、辿らねばならぬ私の新しい愚行があるのかも知れない。

*

人々の真実の心といふものは、自分が世の中で一番好きだと思つてゐる人の事を一番上手に語りたいと希つてゐるものらしいが、さうは行かぬものらしい。

人々がいろ〳〵な品物（勿論人間も人間の残した仕事もこの品物の中へ這入る）に惚れ込むと、自分達の心の裡に、他人にはわからぬ秘密を育て上げるものだ。この秘密は愚かしさと共に棲み乍ら最も正しい事情を摑んでゐるのを常とする。冷眼には秘密はない、秘密を育てる力はない、理智はいつも衛生に止まる。人間の心の豊富とは、たゞこの秘密の量である。

だが、人々はめい〳〵秘密を、いやでも握り潰して了ふのが世の定めであるらしい。歌とは、敗北を覚悟の上でのこの世の定め事への抗言に他ならぬ。ランボオ集一巻が、どんなに美しい象に満ちてゐようとも、所詮、この比類のない人物の蛻の殻だ。彼は死んだのだ。まさしく永久に。この蛻の殻を前にして、いろ〳〵な場所で、いろ〳〵な瞬間に、私の心がいろ〳〵な恰好をしてゐる時に、私が育てた私の秘密を、握り潰さう。

時として、私が街々を行く人々に見附ける、あの無意味な程悲しげな顔は、自分の秘密は秘密にして置きたいと希ふ無意味な程悲しげな心を語つてゐるのであらうか。この街行く人々の心が、心の奥底までも歌ひ切りたいと希ふ世の最上詩人等の心から、さう隔つたものとも思はれぬ。私は、手を拱いて自分の硬ばつた横顔を思ふ。

私が人々に自分の横顔しか許さないのなら、人々が私に、人々の横顔だけしか許さない事を悲しむまい。こんな風にもの事を考へるのは、私を少しも幸福にはしないが、私はこの世に幸福なくらしをする為に生れて来たとは夢にも思つてはゐない。私はたゞ芸もなく不幸であるに過ぎぬ、ただ芸もなく。

かうして文字を並べて行き乍ら、どうして、かう白々しい顔を拵へ上げて了ふのかと私は訝る。きつと私はてれてゐるに相違ない。併し、私はてれるといふ言葉が、世間の人達が信じてゐる様に一種の高等語だとは思つてゐない。てれるといふ心は、天然自然の心から遠ざかつた、人工の

からくりの仕掛けられた心だとは思つてゐない。人間はよちよち歩ける様になれば、はや、てれる事は覚えるものだ。良心の藪にらみも亦恂に自然なのである。

ランボオ程、己れを語つて吃らなかつた作家はない。痛烈に告白し、告白はそのまゝ、朗々として歌となつた。吐いた泥までが晃く。彼の言葉は常に彼の見事な肉であつた。如何にも優しい章句までが筋金入りの腕を蔵する。ランボオ程、読者を黙殺した作家はない。彼は選ばれた人々の為にすら、いや己れの為にすら歌ひはしなかつた。たゞ歌から逃れる為に、湧き上つてくる歌をちぎりちぎつてはうつちやつた。その歌声は無垢の風に乗り、無人の境に放たれた。彼程短い年月に、あらゆる詩歌の意匠を兇暴に圧縮した詩人はゐない。人々は彼と共に、文学の、芸術の極限をさまよふ。この秘教的一野生児のものした処には、その決然たる文学への離別と、アフリカの炎熱の下の、徒刑囚の様な黙々とした労働の半生が、伝説の衣を纏ひつけ、彼の問題は日に新たであるらしい。

だが、もはや私には、彼に関するどんな分析も興味がない。彼は、人々の弱々しい、ふつ切れない讃嘆を呼び集めては、マラルメの所謂「途轍もない通行者」である事を、いつまでも止めないであらう。

夢を織る事は人々の勝手だ。諸君は、幸ひに、私の駄訳に、諸君の夢を惜まない事を。私は自分の仕事を自慢もしまい、謙遜もしまい。

「繊維のくま〳〵迄も、明晰な音の滲透した、乾燥した、柔軟な、ストラディヴァリウスの木の様な」とは、クロオデルがランボオの文体を評した言葉である。これは適確だ。私はどうやら、彼の乾燥、先づ眼をとらへる。苛立たしい程、ど強く、硬く、光り輝く彩色は、そのなかばを写し得たかも知れないが、これを貫く彼の柔軟、重厚なまた切ない迄に透明な息吹きに至つては、はや、私の指先は徒らに虚空に描く。

*

浅草公園の八卦やが、私は二十二歳の時から衰運に向つたと言つた。私が初めてランボオを読みだしたのは二十三の春だから、ランボオは私の衰運と共に現れたわけになる。手に入れたのは『地獄の季節』のメルキュウル版の手帳のやうな安本であつた。私は彼の白鳥の歌を、のつけに聞いて了つた。「酩酊の船」の悲劇に陶酔する前に、詩の絶縁状の「身を引き裂かれる不幸」を見せられた。以来、私は口を噤むだ。いや、たゞ、私の弱貧の為にも、私は口を噤むで来た筈だ。

その頃、私はたゞ、うつろな表情をして、一日おきに、吾妻橋からポンポン蒸気にのつかつて、向島の銘酒屋の女のところに通つてゐただけだ。船は、私のお臍のあたりまで機械の音をひゞかせて、早いやうな、遅いやうな速力で、

泥河をかき分けて行く。私の身体は舳先に坐つて、半分は屋根の蔭になり、半分は冷つこい様な陽に舐められて、『地獄の季節』と一緒に懐中にした、女に買つて行く穴子のお鮨が、潰れやしないかと時々気を配つたり、流れて来る炭俵を見送つたり、丸太が一本位は船と衝突してもよさそうなものだなどと、なるたけ考へても何んにもならない事を択つて考へる事にしようと思つたりする。この『地獄の季節』には一ぱい仮名がふつてあつた、どうしても、見当のつかない処は、エヂプトの王様の名前みたいに、枠を書いて入れてある。この安本は大事にしてゐたが、友達の富永太郎が死んだ時、一緒に焼けた。思ひ出しては足の裏が痒くなるのをこらへる。ヴェルレエヌがパイプを咬へ、ポケットに手を突込んで歩いてゐる流竄天使の様なランボオを粗描してゐる。富永はその絵によく似てゐた。ちつとも金がない時でも滑々した紺碧の上に、鉄鏽色の帯の貫いた、「海の児」の包みは豊富にポケットに入れて、いいパイプが欲しいと言つてゐたつけ。肺を患つて、海辺に閉込められたが、「私には群集が必要であつた」と詩に歌ひたいばつかりに、直ぐ逃げ帰つて来た。人混みをのたくり歩く彼に、私はついて歩いた。想へば愚かにも、私は彼の夭折をずゐ分と助けた。そして今、私の頭にはまだ詩人といふ余計者を信ずる幻があるのかしらん。私は知らぬ。

ランボオの三年間の詩作とは、彼の太陽の様な放浪性に対する、すばらしい智性の血戦に過ぎなかつた。かなぐり捨てられた戦の残骸が彼の歌であつた。芸術といふ愚かな過失を、未練気もなくふり捨てて旅立つた彼の魂の無垢を私が今何としよう。彼の過失は、充分に私の心を攪拌した。そして、彼は私に何を明かしてくれたのか。たゞ、夢をみるみじめさだ。だが、このみじめさは、如何にも鮮かに明かしてくれた。私は、これ以上の事を彼に希ひはしない、これ以上の教へに、私の心が堪へない事を私はよく知つてゐる。以来、私は夢をにがい糧として僅かに生きて来たのかもしれないが、夢は、又、私を掠め、私を糧として逃げ去つた。私は、私の衰運の初めから、私といふ人物が少しも発達してゐないとは思ふのだが、又うつろな世の風景は、昔乍らにうつろには見えるのだが、たゞ、今はその風景は、昔の様に静かに位置してゐない様だ。人々は其処此処の土を掘り、鼠の様に、自分等の穴から首を出し、あたりを見まはす。私もやがて自分の穴を撰ばねばなるまい。そしてどの穴も同じ様に小便臭からう。

『あゝ、この不幸には屈託がないやうに。』

果てまで来た。私は少しも悲しまぬ。私は別れる。別れを告げる人は、確かにゐる。

（昭和五年十月）

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.com